

Antitled友の会

第3回研究大会

プログラム・予稿集

日時：2024年9月6日（金）11:00～17:30（10:30開場）
会場：立命館大学衣笠キャンパス & Zoom

プログラム

開場 10:30

開会の辞・趣旨説明 (11:00-11:15)

個人報告① (11:15-12:10)

総力戦のなかの制限戦争構想——軍事研究会と会長桑木崇明を中心に——

松本 昂也

(Lunch)

個人報告② (13:10-13:40)

マゾヒスト作家・鬼山絢策が観た女子プロレス——戦後家父長制と冷戦文化——

瀬戸 智子

個人報告③ (13:40-14:10)

欲望を語る技法——戦後日本において肯定的な「変態性欲」表現が獲得されるまで——

河原 梓水

(Coffee break)

個人報告④ (14:25-15:20)

史劇から歴史叙述へ——坪内逍遙の歴史思想——

嶋津 麻穂

個人報告⑤ (15:20-16:15)

遊廓の「外側」へ

——松村喬子「盲目鳥よ 何処へ行く」(1930) に描かれる娼妓の弟の手紙をめぐって——

山家 悠平

(Coffee break)

個人報告⑥ (16:35-17:30)

戦前期ボーイスカウトと「山県有朋的なもの」——薩摩人脈に注目して——

温水 基輝

閉会の辞 (17:30)

報告予稿集

個人報告①（報告40分・討論15分）

総力戦のなかの制限戦争構想——軍事研究会と会長桑木崇明を中心に——

松本 昂也（近代日本軍事史）

第一次世界大戦における総力戦の出現は、日本の軍人たちに深刻に受けとめられ、総力戦体制の構築をはじめとして、さまざまなかたちで、対応がすすめられた。しかし、その一方で、太平洋戦争開戦に際して、日本の戦争指導者たちは、交戦国のどちらか一方が壊滅的な打撃を受けるまで戦争が続くという観念は希薄であった。こうした戦争終結認識は、第一次世界大戦以前の戦争観に基づくものであり、現実の様相とは大きく異なったものであった。

とはいえ、総力戦を熟知する立場から制限戦争を志向する向きも存在した。軍事研究会という組織は参謀本部戦争指導課に対して、対米英戦争を限定的な目的を設定し、早期に終結に導くことを提唱している。この会は、その知見を認められながらも予備編入となった軍人を、参謀本部の嘱託として構成された組織であり、軍事諸般の調査研究および普及を担うとともに、戦争指導等に対する助言も行った。

本発表では、軍事研究会の史料、および活動の全期間にわたって会長を務め、学究肌の軍人であった桑木崇明の著作を中心に取り上げる。会の活動については詳らかでない点も多いが、桑木が行った講演の記録が会の名前で掲載されている例なども確認できる。これらの史料を、戦史研究の大家として知られ、会の研究活動において重要な役割を果たした酒井鎬次の著作と対照させつつ検討する。会は限定した戦争目的のもとで戦果を挙げ、寛大な和平条件を示し、妥協的な和平を実現しようとした。戦局が悪化するなか、注目の対象となったのが、敵国の世論、士気という要素であった。桑木らは、総力戦において重要な要素を占める国民の戦意に注目し、敵国の厭戦気分の誘発を図ることで、制限戦争の実現を目指したのである。

参考文献

片山杜秀『未完のファシズム - 「持たざる国」日本の運命-』新潮選書、2012年

玉木寛輝『昭和期政軍関係の模索と総力戦構想-戦前・戦中の陸海軍・知識人の葛藤』慶応大学出版会、2020年

個人報告②（報告20分・討論10分）

マゾヒスト作家・鬼山絢策が観た女子プロレス ——戦後家父長制と冷戦文化——

瀬戸 智子（文化史、ジェンダー研究）

日本の女子プロレスは、1948年ごろ進駐軍キャンプでのショーとして始まった。1954年のアメリカ人女子レスラーの来日興行を機に女子プロレス団体が複数発足し、「第一次女子プロレスブーム」とも呼べる活況を呈した。この時期の女子プロレスに関する歴史研究は近年始まったばかりだが、メディア史料のなかには多様な女子レスラー表象が散見される。文化人による女子プ

ロレス観戦記事や、強くても心は「純真」な女子レスラーが登場する大衆小説などはその一例だ。新聞・雑誌の成人向けマンガにも女子レスラーは頻繁に描かれた。こうした描写には、女性どうしの対決を茶化したり大柄なレスラーを揶揄するなど、当時のジェンダー規範が反映されている場合が多いが、なかには痴漢を撃退するレスラー像や日米試合の可能性などに言及するものもあり、「強い女性」像の多義性も垣間見ることができる。

本報告では、『奇譚クラブ』1955年11月号所収の、マゾヒスト作家・鬼山絢策の「女子プロレスリング雑感」をとりあげる。鬼山は、試合で男性レフェリーが女子レスラーにいためつけられる場面を評価し、女子レスラーにはサディストの素養を期待した。この時期の女子プロレスをレフェリーの演技も含めたショーとしてとらえるのは碧眼だが、自身の性的快楽へのこだわりからか、期待どおりではない女子レスラーの現状に対する不満も吐露し、しまいには理想のケアをしてくれる有能なサディスト女性像の押しつけの様相を呈してくる。同時期のマゾヒスト男性作家の作品に関しては、戦後のエリート日本男性の自己再肯定過程で求められたサディスト女性像が河原梓水『SMの思想史』で分析されている。マゾヒストの作品から階級的・歴史的に条件づけられたナショナリズムを分析した河原の方法を参照しつつ、本報告ではマゾヒスト作家が観た女子プロレスと、家父長制を支えたジェンダー規範および冷戦期文化政策に見られた女性像を関連づけて考察する。

参考文献

河原梓水『SMの思想史 戦後日本における支配と暴力をめぐる夢と欲望』（青弓社、2024年）

鬼山絢策「女子プロレスリング雑感」『奇譚クラブ』1955年11月号、152-154頁

塩見俊一「戦後日本における女子プロレス生成に関する試論 『いかがわしさ』と『健全さ』のはざままで」有賀郁敏編『スポーツの近現代 その診断と批判』（ナカニシヤ出版、2023年）151-173頁

個人報告③（報告20分・討論10分）

欲望を語る技法

——戦後日本において「変態性欲」の肯定的表現が獲得されるまで——

河原 梓水（セクシュアリティ研究）

サディズム・マゾヒズム・同性愛・異性装などのセクシュアリティのあり方は、19世紀末ヨーロッパ・ロシア精神医学界において性的倒錯として病理化され、この病理概念は日本にもほタイムラグなく輸入され「変態性欲」として定着する。特定の性愛のあり方を精神病理とする認識枠組みは、その後の性的マイノリティの表象に大きな影響を与えていく。

1947年に創刊された雑誌『奇譚クラブ』は、1950年半ばごろに、サディズム・マゾヒズム・同性愛・異性装など、当時「変態性欲」と呼ばれた欲望を抱く当事者（マニア）たちの一人称の告白手記を掲載するようになり、次第にマニアのみを執筆者とし、彼らに寄り添う雑誌になってゆく。このような質的転換を促した仕掛け人は、編集者として、挿絵・記事を多く手掛けた須磨利之だと言われている。須磨は緊縛挿絵を少しずつ載せたり、一人称のマニアの告白記事を載せたりして、マニアからの投稿を増やす様々な仕掛けを施した。

しかし、1940年代の「奇譚クラブ」を見れば、須磨の手による作品でも、「変態性欲」を犯罪と結び付けたり、レスボス（レズビアン）カップルが悲劇的な自殺を遂げたりと、当時の社会に

存在した性的マイノリティへの差別的なステレオタイプを反復しているものがある。おそらくこれは、当時、これらの周縁的セクシュアリティを肯定的に表現する形式が、社会にほとんど存在しなかったことによると思われる。須磨という多彩な才能を持った当事者をもってしても、当時「変態性欲」として強くスティグマ化されていた欲望を肯定的に描き出す表現形式を、この時まで獲得できていなかったのである。

本発表では、須磨が『奇譚クラブ』の編集に加わった1948年から、読者投稿誌としてのスタイルがほぼ確立する1952年の間の『奇譚クラブ』の誌面を検討し、須磨を代表とする、この分野における超初期の開拓者たちが、どのように差別的な表現形式から脱却し、「変態性欲」を肯定的に表現する技法を獲得していったのかを明らかにする。

参考文献

前川直哉『<男性同性愛者>の社会史 アイデンティティの受容／クローゼットへの解放』作品社、2017
河原梓水『SMの思想史 戦後日本における支配と暴力をめぐる夢と欲望』青弓社、2024

個人報告④（報告40分・討論15分）

史劇から歴史叙述へ——坪内逍遙の歴史思想——

嶋津 麻穂（近代史）

一般に、坪内逍遙は文学者として知られる。しかし、彼は単に狭義の文学に留まらず、演劇改良を中心に、舞踊、美術、児童劇、教育や倫理の多方面に業績を残しており、歴史に対する思索も続けた人物でもある。彼の歴史に対する思索は、大正期に早稲田大学から出版された坪内逍遙監修の『通俗世界全史』『国民の日本史』に結実したといえる。これらの通史は、文化史や民衆史に重点を置き、専門史家ではない執筆陣による生き生きとした歴史叙述が試みられたもので、歴史思想の改造による善導を意図したものであった。そしてこれらの通史監修以前に彼が取り組んでいたのが、史劇の執筆である。

本発表は、坪内逍遙の史劇執筆経験とのちの通史監修の関係を考察するものである。明治期の歴史改良に関する先行研究には、彼の代表作「小説神髓」を取り上げたものはいくつかある。とはいえ、逍遙研究でも明らかにされているように、彼が歴史の事実を重視し始めるのは、明治27～28年発表の大坂の陣を題材とした彼の最初の史劇『桐一葉』を経てからのことであった。さらに逍遙研究では、逍遙が歴史を重視したことが「歴史離れ」を掲げる森鷗外と好対照をなしたことが指摘されている。

本発表では、逍遙が明治前半期の歴史をめぐる錯綜と「活歴劇」の台頭のなかで、どのように史劇を構想したのかを概観したのち、彼の歴史に関する言説と史劇を照らし合わせ、史論と「伝説」に注目しながら史劇による歴史叙述の方法を分析するとともに、思想的背景を探る。逍遙は、価値中立的な歴史叙述には賛成しつつも、表面的な史実のみを並べる叙述に反対し、文学作品や伝説を組み込んだ史劇を構想した。さらに逍遙は、長く人びとに共有されてきた伝説を過去と現在を結ぶ動態ととらえ、これを歴史とし、その構想を反映した通史を目指すことで、一次大戦後の混迷する思想状況の善導を試みたのである。

参考文献

日本思想史研究会編『日本における歴史思想の展開』吉川弘文館、1965
山口道弘「三上参次と官学アカデミズム史学の成立」『法政研究』86(4), 2020-03, 289-354頁
吉岡亮『文明論と伝記の近代 明治前半期の歴史と文学』文学通信、2024

個人報告⑤（報告40分・討論15分）

遊廓の「外側」へ

——松村喬子「盲目鳥よ どこへ行く」（1930）に描かれる娼妓の弟の手紙をめぐる——

山家 悠平（日本近代女性史）

1926年9月に名古屋中村遊廓から逃走した松村喬子（1900-1993）は、自由廃業後、労働運動家となり、様々な現場で発言し、遊廓時代の経験をもとに文章を発表している。最も有名なのは『女人芸術』に1929年から1930年にかけて発表された「地獄の反逆者」（『地獄の反逆者 松村喬子遊廓関係作品集』として琥珀書房から2024年7月に刊行）であるが、本報告では、松村が東洋モスリン争議（1930年2月、昭和恐慌下に東洋モスリン亀戸工場における人員整理をきっかけに起こった大争議）の真っ只中にいた1930年に『文学風景』（5月創刊号）に発表された短編「盲目鳥よ どこへ行く」を取り上げる。本報告において、焦点をあてるのは作品に登場する労働運動家の弟から、楼内の主人公浮舟に送られた手紙である。

同作品は大阪の農村で生まれた純朴な少女が飛田遊廓で売れっ妓になり、やがて転落する様子が、主人公の視点よりの三人称で描かれた小説である。「暴露文学号」と銘打った掲載誌の編集後記では「本誌本号での呼物……東洋モス争議での、疲労をおして執筆して下さったのです。闘争の中から生まれた文学、血がにじんで居ります」と評されており、その注目の高さがうかがえる。遊廓逃走後比較的早い1927年頃に書かれたと推測される「地獄の反逆者」では、松村をモデルとする主人公が楼内で娼妓たちにストライキの訴えともとれる演説をする場面が描かれていたのに対して、「盲目鳥よ どこへ行く」においては、楼内の主人公に労働運動の理念を伝えるのは楼の外側にいる弟の手紙である。そこではかつて遊廓の「内側」から遊廓のなかの娼妓たちに訴える、という水平的な呼びかけであったものが、「外側」からの働きかけに変化しているのである。

本報告では、その時期の松村の労働運動家としての活動や、松村の廃娼論の変遷についてもふれながら、その視点の変化の意味についてさぐりたい。

参考文献

山家悠平『生き延びるための女性史』（青土社、2023年）

鈴木裕子『女工と労働争議』（れんが書新社、1989年）

個人報告⑥（報告40分・討論15分）

戦前期ボーイスカウトと「山県有朋的なもの」——薩摩人脈に注目して——

温水 基輝（日本近代史）

ボーイスカウト（以後、BS と略記）とは「より良き社会人の育成」を目的とした教育団体である。イギリスの退役軍人ロバート・ベーデン＝パウエルが1907年に実験キャンプをしたことが、その始まりである。日本においては1922年に前身組織である少年団日本連盟が結成された。

さて、この少年団・BS史を本格的に研究し始めたのは、教育学者の上平泰博・田中治彦・中島純の三氏である。彼らは同団体を教育団体とし、社会教育史の観点から分析した。以後、少年団・

BS史研究は教育学分野で発達する。

なお、これらの研究は少年団・BSの「内部」を分析したものである。一方、少年団・BSと他の諸団体との関係に注目した研究、つまり「外部」に目を向けたものは存外少ない。少年団日本連盟が設立された前後、政党・各省庁・軍部などの諸団体の微妙なパワーバランスのもと、国家運営が行われた。そして、そのような状況下で運営を担っていた華族・官僚・軍人の幾人が日本連盟の幹部として名を連ねた。少年団は政治との距離が存外近い団体でもあり、よって当時の情勢を抜きに少年団を語ることはできない。また、先行研究の相対化という意味でも、戦前期BSの政治史的な研究は重要である。そこで、その基礎作業として、本報告は、「人的まとまり」から戦前期BSを分析する。

その際に注目するのは「薩摩人脈」である。少年団の幹部に目をやると、いくつかのまとまりが観測できる。その中でもとりわけ目を引くのは「薩摩人脈」である。全体から考えると、その比重は決して多くないものの、戦前期ということを考えれば無視できるものではない。そこで、本稿では「薩摩人脈」に注目したい。そして、具体事例として特に宮中・陸軍との関係を取り上げ、戦前期BSを分析する。

参考文献

田中治彦『ユースワーク・青少年教育の歴史』（東洋館出版、2015年。特に第5・6章）